

農業土木を支えてきた人々

市川五郎兵衛翁と新田開発

栗田 亘*

I. はじめに

長野県北佐久郡には、新田開発のために構築された用水ゼキが非常に多い。戦国末期から江戸時代の初めにかけて、開削された用水は23路線に及んでいるが、この中、主なるものをあげると表-1のとおりである。

表-1

用水名	開削者	開発年代
(1)三河田ゼキ	市川五郎兵衛	元和年中
(2)常木ゼキ	市川五郎兵衛	元和年中
(3)五郎兵衛ゼキ	市川五郎兵衛	寛永4年(1627)
(4)塩沢ゼキ	六川長三郎	正保3年(1646)
(5)御影ゼキ	柏木小右衛門	承応2年(1653)
(6)八重原ゼキ	黒沢嘉兵衛	万治2年(1659)
(7)宇山ゼキ	黒沢嘉兵衛	寛文2年(1662)

もともと、耕地の開発は古くからその土地に住みついた人々が、個人または共同作業により、自分の周囲に生産の土地を少しずつ増やしていったものである。

文明、長享のころから、元龜、天正の時代にわたる約百余年に及ぶ長い戦国乱世が、徳川氏の全国統一によって一応おさまり、幕藩体制も確立し、世の中が安定してくると、産業開発の機運が飛躍的に高まり、生産拡大のため用水ゼキの開削、引水による新田(農村)開発が数多く企てられた。こうした時代に先駆けて、身命を賭し、私財をこごとく投げうって、三用水路の開削を行い、その総延長10有余里、これを潤す開墾田は約700町歩に及ぶという大事業をなし遂げた人こそ、市川五郎兵衛翁である。

II. 市川五郎兵衛翁略伝

1. 略伝

市川五郎兵衛真親翁は、元龜2年6月9日(1571)上

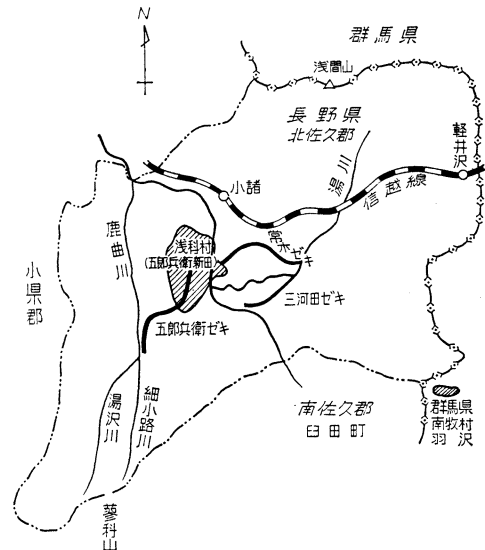


図-1

州南牧羽沢に生れた(現在の群馬県甘楽郡南牧村羽沢)。翁の祖先は新羅三郎義光であり、3代下った奈古八郎義行は、山梨郡府中に住み、源頼朝が源家再興の旗挙げをするや、これに従い軍功を立て、甲斐国八代郡市川荘を賜わり移り住んで市川姓を名乗ったと伝えられる。義行から7代目市川五郎満久は、南朝に与して、足利氏に敗れて討死し、その子真重は、足利氏の治世となるや、市川荘は安住の地でなくなり、家臣従僕を率いて上州南牧にのがれ、以来150年をこの山谷の地に隠伏した。市川家が佐久郡と関わりを持つようになったのは、真重より3代下った真治で、武田信玄の幕下となり、数々の武功によって信玄直筆の感状を受け、天文16年に瀬戸(現在の佐久市平賀)、永禄3年には小田切高野町(南佐久郡白田町切原および佐久町)に120貫*、蓬田、柔山(北佐久郡浅科村)に70貫、海瀬三ヶ(南佐久郡八千穂村)に70貫の土地を知行として領有したのが始まりである。

* 長野県北佐久地方事務所(くりた わたる)

* 1貫は約1町歩

真治の孫、市川四郎兵衛真久（新田開発者市川五郎兵衛の父）は、信玄の小田原攻め等に参加し、幾多の軍功をたてた武勇すぐれた人であったが、その後、いくばくもなく武田氏が滅び、甲信の地は信長の支配下となり市川家の信州各地における領地はことごとく没収され、わずかにその本拠地であった上州羽沢付近を残すのみとなった。

秀吉時代となり関東一円は徳川家康の支配するところとなったが、この時勢は市川家に幸いせず、真久一党は再び上州南牧の山谷に籠居し、譜代の従者には祖先以来領有してきた付近の山野を分けあたえ、新畑を開墾し、住居させるなど、ひたすら郷民の治政に専念し、南牧の地の経営に力を尽した。

家康は真久の武勇と智謀を伝え聞いて、麾下に加えるべく再度仕官をすすめたが、主家武田家の仇敵である徳川家にその節を曲げ仕えることは、俠義剛骨の真久にはできなかった。その後、文禄2年（1593）に三度招請され、やむを得ず一子五郎兵衛真親（21才）を江戸に出府させたが、曾祖父真治や、父真久の厳格な薫育を受けた大胆、剛直な真親は家康の懇々たる仕官のすすめにもかかわらず、「志、既に武に非ず、殖産興業にあり」と答え決然としてこれを断った。家康の威をもってしてもいかんともなし難く、真親の意をくみ、家康は殖産開拓許可の朱印状を与えたのである。その内容は、

1. 家康の領分内での鉱山発掘および山林原野の開拓開墾の許可。2. 家臣の居住の自由は認めるが、召返す時は徳川家に届け出をすること。3. 家康政権支配下にある百姓の屋敷まわりの草木切りは認めないが、その他一切の伐採刈取りは勝手であること、の3カ条であった。家康の天下統一がなった元和元年になると、この朱印状が多角的な光彩を放つ時期となった。

この時期、祖先からの居住地南牧は、高山に囲まれ、溪谷は深く、既に開墾適地もなく一族を養うには十分な領有地ではなかった。五郎兵衛翁は既に不惑をこえる年令となっていたが、生来の開拓魂と、殖産興業に対する情熱が新天地の開発へと、かり立てたものと思われる。佐久郡は過去50年にわたり、市川家の所領地であったこともあり、住民に対する善政もあって、翁がこの地の開発を着想したのも偶然ではなかった。新田開発に着手するや、住民は嬉々として集まり、利害をこえて協力を惜しまなかった。たちまちにして、700町歩の水田を開くことができたのは、曾祖父以来の市川家の徳望が佐久一円の地にいかに深く浸透していたかを偲ぶに足るものである。

翁は、多くの関係者を引きつれ、佐久郡に入ると、ま



写真-1 古文書3万点をおさめる五郎兵衛新田記念館

ず三河田、常木の2用水の開削を行い、やがて、五郎兵衛新田用水の開発に着手した。この3セキ中、最も難工事であり、翁が心血を注いだ五郎兵衛用水の開発実態について、つぎに述べる。

2. 五郎兵衛用水の開発

最初、翁は南佐久郡臼田付近で流量豊富な千曲川からの導水計画を進めたが、途中、幾多の中小河川と交差するため、工事の難渋さを知りこれを断念した。ついで蓼科山にわけ入り、篠笹の繁る山腹や、原生林の深い溪谷を探り、峰によじ登っては地形を考察し、辛苦を重ねた調査の結果、蓼科山頂に近い標高1,800mの高所にこんこんとわき出る源泉を発見し、さらに数カ所のユウ水を得て、これを引水の端緒とした。これらのユウ水はすべて細小路川（鹿曲川上流）の源泉であり、途中の溪流を併せながら、旧春日村本郷地籍（現望月町春日）で湯沢川と合流して鹿曲川となる。源流から14km余りのこの合流点において、河川をせきとめ水門を設けて鹿曲川沿いに水路を開く計画を立てた。しかし、全延長約20kmの五郎兵衛セキ中、この区間約2.5kmは鹿曲川に面して、数10mの断がいが連なり翁が最も工事に苦勞した難所であった。地質的には、蓼科山の噴出物によるたい積層で、砂岩、角レキ岩のくみあった累積層であるが、この当時の技術面から見れば最悪の立地条件の中を、トンネルをうがち、あるいは高棚式に岩を切り込んだ水路を設け、石積堤体を築き、木ヒをかけて沢谷を渡り、漏水防止工としての芝張り、土俵積等を行いつつ約2,300m間の難所を切り開いた。翁はこの難工事に際しては、石切りを集め、鍛冶を雇入れ、工夫の一部を蓼科山に送り薪木を集め、炭を焼かせる等綿密周到な計画をたてた。当時の古文書による目論書には、詳細に計画が記載され、この区間のみで永楽銭35貫817文、黒米24石4斗7升5合、2,224.5人扶持の支出予定となっていた。よ

うやくこの難所を突破した後、地形に応じて木ヒ、トンネル、開キ_ヨ等の工法で、断がいを抜き、野を縫い山を回って、約20 kmの水路を完成した。

技術的にも現代の土木事業と異なり、測量術も幼稚で、見るべき建設資材もない時代に、たぐいまれな創造性を駆使した翁の土木技術は、まったく驚嘆の他ない。

たとえば、高さ2.5 mにも及ぶ土盛水路の漏水、決壊防止策として、切芝の田築積の妙法や、真綿を流しての漏水孔防止法、あるいはトンネル内の土砂たい積を防ぐため、底床部を波形に掘り、中心線を左右にゆるく屈曲させて乱流をおこし、土砂を流下させる方法等、数多くの新技術を考案し大工事を完成した。これらの技術はその後、幾多の新田開発者に引継がれ、とくに佐久地方では親しく翁の事業を学び、翁もまた、何かと援助指導を行ったといわれ、この時代に続々開発された新田の教祖的先駆者であった。もちろん、翁のすぐれた土木技術は、一朝一夕に会得したものではなく、郷里南牧において山間地の開墾を行った実践の体験に基づくものも多く、佐久地方における新田開発も試行錯誤の連続であったことも事実であろう。さらには、翁の徳風と俠気を慕って、全国から多くの浪人志士たちが南牧の地に来訪し、終生、翁の下にとどまり事業を助けた人々がいた。これらの中には、軍略家で数理にたけ、測量技術を身につけた人や、築城の経験者等もあり、適性に応じてその任にあたり、事業を遂行したといわれる。

当時、翁は上州の砥沢において、身内をして砥石山を経営させていたが、1年間の総収入が約1,300両といわれ、幕府への運上金が約500両、人夫その他の諸経費を差し引き約200両の純益を上げていた。この利益をすべて新田開発につきこみ、さらに寛永20年(1643)に借財整理をした結果、その金額は1,412両に達したといわれる。

かくして、用水路も完成し、翁は上州以来の関係者はもちろん、地元先任者や、新来の人々をも平等に矢嶋原の原野を開墾させた。寛永8年には、既に石高439石4斗7升、同19年には、515石1斗1升に進み、荒漠とした草原が一望の水田と化したのである。当時の小諸藩主の検地を受け、五郎兵衛新田村として一村をなし、寛永の末には実に870石余(現在の浅科村の総反別471haとはほぼ同じ)となった。

しかし翁は、私財を投じて開削した水路の用水権を少しも私することなく、一切をあげて全村民の所有とし、自らは何の特権も求めることがなかった。

村の基礎も安定し、水田の開拓も一段落した寛永の

末、翁は借財整理と、市川家関係者の生活保護のため、故郷南牧に帰り、しばらくこれに専念したが、既に70才となり仏門に帰依し、悠々自適の生活に入った。

晩年、重金法印を開山として、羽沢に建てた世尊院を始め、いくつかの寺や堂を建立して仏道に精進したが、寛文5年(1665)9月9日94才の天寿を全うして五郎兵衛新田の地に没した。遺言により北佐久郡浅科村の救里丘に葬り、墓碑には覚樹院殿鉄円心大徳、当村開祖市川五郎兵衛源真親と刻まれている。

III. 古文書について

用水を引き、耕地を開き、営々として維持管理にあたった苦闘の歴史は、農民の生活史そのものである。

幸いにして、この開拓史ともいえる古文書が当時から、そして新しいものでは、明治年間まで約350年にわたり約3万点が現存している。一時期、資料の散逸を防ぐため、約2万点が学習院大学に寄贈され、整理研究が行われていたが、昭和48年に「五郎兵衛新田記念館」が建設され、ここに浅科村や用水に関する資料が集められたが、古文書の大半が大学に移されていたことを知った数多くの農民から返還を要望する声が挙った。さらに53年に起きた浅科村の部落差別問題を契機として、いわれなき差別に苦しむ解放同盟の人々も、村の生立ちを研究することにより、その真実が解明されるとの立場から、返還運動に参加したが、幸いに大学当局の理解ある対応により54年9月に返還の調印が行われた。現在、学習院大学、信州大学等の研究者、土地改良区関係者および地元古老の方々により、資料の蒐集分類作業が進行中であり、近い将来、その全容が明らかにされるであろうが、われわれを含め多くの人々がその成果を待望している。

IV. おわりに

翁をはじめ多くの先覚者により開発された北佐久郡の用水や、約7,800 haに及ぶ水田も、昭和30、40年代におけるいくつかの大規模カン排事業、あるいは40、50年代のホ場整備事業等により、まったく面目を一新した近代的農村地帯となりつつあるが、その昔、創造された用水や、開墾田の形質が時代とともに、いかに変ぼうしようとも先覚者たちの開拓魂は、佐久の農民の間に永久に生き続けるであろう。

引用文献

- 1) 五郎兵衛用水史：伊藤一明著
- 2) 北佐久の農業土木：北佐久土地改良事業研究会編
- 3) 北佐久郡志(第4巻)：北佐久郡志編纂会

[1980. 3. 28. 受稿]